

医史学研究者岩熊哲の旧蔵本：「日本医学史覚書」

相部，久美子
九州大学附属図書館元職員

<https://doi.org/10.15017/2327999>

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2018/2019, pp.28-36, 2019-07. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International

報告

医史学研究者岩熊哲の旧蔵本 —「日本医学史覚書」—

相部 久美子[†]

<抄録>

医史学研究者岩熊哲が執筆した「杏仁醫館隨筆」の記事を基に医学図書館貴重図書室で発見した書籍「日本医学史覚書」が岩熊哲の旧蔵本である可能性について調査し、同書籍と関連する人物について調べた事項について報告する。

<キーワード> 岩熊哲, 杏仁醫館文庫, 九大醫報, 杏仁醫館隨筆, 生理学教室, 加来数馬, ノールトン・ホイットニー, 日本医学史覚書, ハイブリヒ・フォン・シーボルト, 献辞, 山内嘉兵衛, リース博士, 杉田玄白, 棚橋陽吉, 松岡玄達, 赤坂氷川神社, 赤坂病院, 富田鉄之助, 勝海舟, 日本銀行, 杉田縫

Toru Iwakuma (1899-1943), His Old Rare Book Collection —Notes on the History of Medical Progress in Japan—

AIBE Kumiko

1. はじめに

医学図書館所蔵の「杏仁醫館文庫」と旧蔵者の医史学研究者であり医師の「岩熊哲」に関して「九州大学附属図書館研究開発室年報 2014/2015」¹に報告してから4年の歳月が流れた。報告時に222冊であった「杏仁醫館文庫」は継続調査及び整理の結果、目録登録冊数が2019年3月末時点で600冊に達した。

「杏仁醫館文庫」の照合は、岩熊哲が使用した蔵書印等の有無の確認と、解剖学教室が購入した受入時の備品番号および受入年月日（昭和18年10月12, 13, 15日）によるが、調査の過程でそれ以降に「生理学教室」が購入した書籍の中に「岩熊哲」の旧蔵書が含まれている事が判った。その書籍が本稿での主要テーマであるが「岩熊哲」が書いた「杏仁醫館隨筆」が同書籍の発見に導いたので先に「杏仁醫館隨筆」について説明し後に同書籍及び関連事項について説明する。

2. 「杏仁醫館隨筆」の中から

岩熊哲が「杏仁醫館隨筆」を「九大醫報」に連載し始めたのは昭和9年12月であるが、初回の序文には岩熊哲の連載開始に対する思いが感じられる²。その当時ドイツ医事週報に連載されていたコラム「Feuilleton」の愛読者であった岩熊哲がそのコラムを『諸家の興味ある医学的隨筆』であると評価し、これから始める隨筆もそのコラムを目標にしていたと考えられる。「杏仁醫館隨筆」初号は2章で構成され「1.

楽聖ベートヴェンの耳疾」, 「2. シルレルが醫たりし頃」である。西洋史, 東洋史, 医学, 哲学, 文学, 芸術, 語学の多岐の分野に於ける岩熊哲の見識の高さが伺え、学生にも判りやすい文章である。「1. 楽聖ベートヴェンの耳疾」は「Feuilleton」に掲載された記事を岩熊哲が翻訳し自身の医学的考察を述べ、原因は若い頃に発症したチフスによる内耳硬化だと終結している。

2号には「3. サルバルサン死を繞りて」, 「4. 国手K先生」が掲載されている³。両方の章が「岩熊哲」と同郷の福岡県直方市近郊の医師に関連する。

「3. サルバルサン死を繞りて」は昭和9年執筆当時岩熊の知人の医師によるサルバルサン投与による患者（炭鉱夫で悪性梅毒患者）の死が訴訟問題までに発展した社会的話題について岩熊自身のサルバルサン使用の診療経験を述べ知人のベテラン医師にサルバルサンの副作用及び使用方法についてインタビューしている。その後の文章がこう続く『卒業試験でも受ける時の様に「サルバルサン」中毒に就いて少し復習しておかう...言ふ迄もないが製品は新しいのを使用せねばならぬ...私が未だ学生であった頃呉先生の臨床講義で梅毒性動脈内膜炎の患者で...』学生への講義を彷彿させられる文章であり、岩熊哲が「杏仁醫館隨筆」の読者のターゲットを学生に置いていたのを示す一文である。

「4. 国手K先生」は20年前に逝去したK病院経営者であるK医師についてのエピソードを書いている。岩熊の文章中にK医師の実名は公表されていないが、

[†] あいべくみこ 九州大学附属図書館元職員 E-mail: kumikoa@ivy.ocn.ne.jp

直方市中泉の開業医「加来数馬 (1862-1916)」であると推測する^{34,6}。「加来数馬」は当時森下仁丹の宣伝で新聞広告に「ドクトル K 先生曰く」の推薦文を書いたのでも知られているが、「岩熊哲」は「加来数馬」の逝去後「加来夫人」の主治医となり「加来数馬」について夫人の談話を聞く機会に何度も恵まれ、岩熊と同郷の尊敬する医師の記録を残して置く事の必要性を感じこの文章を書いたと推測する。私も「加来数馬」について調査すると本学にも関係があり郷土の歴史上の人物である事が判った。

「加来数馬」は明治 14 (1881) 年に福岡県立福岡医学校を卒業した。「大森治豊 (1852-1912)」の高弟で大森の元で県立福岡病院の助手を務めた時期もあった。明治 14 (1881) 年に卒業後上京し順天堂医院の佐藤進 (1845-1921) に外科学を東京医科大学教授桜井郁次郎 (1852-1915) に産婦人科学を学び明治 18 (1885) 年に直方市中泉に帰郷し開業した。明治 35 (1902) 年に東大の「土肥慶蔵 (1866-1931)」と共にドイツ私費留学した。「加来数馬」はドイツ往路の船内で英国国王戴冠式出席のため乗船中に肺炎を発症した「小松宮殿下 (1846-1903)」を診療し、回復後もイギリスまで同行を求められ、イギリスに途中下船し報奨金を与えられた事は郷土で英雄伝説として語り継がれている。ドイツのベルリン、ロストック大学で 2 年間皮膚・耳鼻・泌尿器科学を学び博士学位を修得した。ドイツのロストックで宮入慶之助 (1865-1946)、高山正雄 (1871-1944)、旭憲吉 (1874-1930) と一緒に撮影した写真を岩熊哲は加来夫人に見せてもらい宮入慶之助についての率直な感想を記している。帰国後は直方市中泉の「加来病院 (創設時の名称は「済衆医館」)」で診療に従事したが病院はドイツから輸入した最新の医療器具を備え医療水準も高く繁栄した。晩年は鞍手郡医師会会長を務め、福岡県医師会の議員メンバーでもあった。⁵

「杏仁醫館隨筆 (その 43)」は「48, 柘榴の核」のタイトルで、編集者からの「軽い読み物を」との要望に応じて書いた文章である⁷。気ままなエッセイであるが一貫して本に関する話題が中心となっている。

最初は哲学者キケロ、モンテーニュの名句について夏から秋に移り行く季節の描写を交えながら解説している。

次に学生からの外国語の解釈の問いに岩熊哲がドイツ語辞書『ハイゼ (Heyses Fremdwörterbuch)』を薦めるのには岩熊哲独自の次の様な一考察があるからである。他のドイツ語辞書に収録されていない日常語句がハイゼに収録されているのはドイツ人が自国語に外来語が混じるのを避けて自国語のみの辞書と外来語 (特殊の語彙) も収録したハイゼを区別して出版したから

であり、日本に於いても日本語の国防運動が推進されている同様の現状がある。

この回には久保猪之吉 (1874-1939) の旧蔵本であった河口信任の「解死篇」の入手を逸したが他の版が入手できた事とカエサル「ガリア戦記」を文化史的な側面から捉えた岩熊の独自の解釈が述べられている。

最後に規定の枚数を埋めるために解剖学教室助教授の森優 (1903-1984) から翻訳出版を勧められ断った岩熊自身の蔵書である駐日アメリカ公使館通訳官「ノールトン・ホイットニー (Willis Norton Whitney, 1855-1918)」が書いた「日本医学史覚書」について書いている。

岩熊が翻訳を断った理由について医学史的価値のあるものでなく既存の日本の書籍からの引用が多く間違いも多いからと記し、同書の巻末に収録されているホイットニーに廉価に購入され母国であるアメリカの陸軍衛生文庫に収蔵された (岩熊は死蔵と書いている) 1500 点の貴重な日本の古医書のリスト (Bibliography) を見て日本の古書籍や古美術・骨董品等が海外に流出する現状を嘆いている。同書について内容的に貴重ではないが岩熊哲の所蔵本は献呈本であり著者ホイットニーの直筆献辞がある事にふれ『大した事ではないが私の本の旧蔵者が日本医学と関係の深いシーボルトの子であるところに面白味がある』と述べている。

即ち旧蔵者はフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796-1866) の次男のハインリヒ・フォン・シーボルト (Heinrich von Siebold, 1852-1908) であった。

3. 「日本医学史覚書」

岩熊哲が「杏仁醫館隨筆 (その 43)」⁷に記述している「日本医学史覚書」に記載された献辞についての内容を引用すると『私の蔵本について一寸誌しておきたい事がある。この本には著者ホイットニーからハインリヒ・フォン・シーボルト (日本医学の恩人なるフランツ・フォン・シーボルトの次子、当時は横浜領事をしていた) への献辞が書き入れてある。明治 18 年 7 月 5 日の日付である』。

「日本医学史覚書 (Notes on the history of medical progress in Japan)」⁸を医学図書館で所蔵しているかどうか九大コレクションで探すと見つからなかったが「CiNii」で調べると九大医学図書館所蔵となっている。更にローカル目録データベースを調査する (調査日は 2015 年 9 月 14 日) と現物不明のために「2001 年 5 月 15 日」に九大コレクションでは所蔵表示を隠している事が判った。実際に貴重図書室、展示室、その他の書架を調査したが現物は見つからなかった。しかし調査を続行すると貴重図書室の所定以外の場所で発見した。

見つかった「日本医学史覚書」(図1)には赤色の「館内閲覧」のラベルが貼られていた。このラベルが貴重書に貼られる事は少ないので何らかの事情があり特別に扱われ別置されていた可能性が高い。中を開くと確かに献辞があった。『To Baron H. von Siebold with Compliments of W. Norton Whitney July 6/85』 翻訳すると「謹呈 H. [ハインリヒ]・フォン・シーボルト男爵へ W. Norton Whitney 1885年[明治18年]7月6日」(図2)

生理学教室の同書籍には岩熊哲の記載通りの献辞はあったが、岩熊の文章中の日付『7月5日』に対し記載されている日付は「7月6日」で「岩熊哲」が使用した蔵書印も「解剖学教室」の教室印も無く、生理学教室の蔵書印と備品番号「16794」の記載がある。生理学教室の図書受入原簿を見ると「昭和19年6月3日」に50円で「Zeittafeln zur Geschichte der Medizin / von J. L. Pagel. (備品番号「16795」12円)と共に「山内嘉兵衛(福岡市千代町の山内書店)」から購入されている。昭和19(1944)年は岩熊哲逝去の翌年であり「杏仁醫館文庫」が解剖学教室で購入された翌年である。現物を開くと本文の所々に「杏仁醫館文庫」の書籍と同様に赤・青の線が引かれ書き込みがされている。また購入書店も同じく「山内嘉兵衛」である。岩熊哲の「杏仁醫館文庫」との共通点を見出した。

生理学教室の「日本医学史覚書」については昭和34(1959)年に当館司書「山川幸雄」によって生理学教室購入の珍本として紹介されている^{10,11}。その紹介記事によるとウィスコンシン大学の脳神経学者リース博士(Hans Henry Reese, 1891-1973)が九大医学部に昭和34(1959)年の春から夏にかけて3ヶ月間研究のために滞在した際に「杉田玄白」の伝記の閲覧を所望し医学図書館図書館員が調査し差し出したのが「日本医学史覚書」で、リース博士は2か月間借用し返却の際に献辞の情報を伝え、その時に図書館は初めて貴重書である事を知った。(実際に以前は一般書として貸出されていたらしく裏表紙にブックポケットの形跡がある)購入者である生理学教室の棚橋助教授(棚橋陽吉)も知らなかった様である。棚橋助教授は医学史に興味があり教室予算に余裕が生じ他の医学史関係図書(上記Zeittafeln zur Geschichte der Medizinを指すと推測する)と一緒に購入したのである。

リース博士について調査するとドイツ生のアメリカ人フットボール選手で1912年のオリンピック出場経験もあり第2次世界大戦中はスパイ活動もしていた変わった経歴を持つ医学者である¹²。杉田玄白の伝記に興味を示したのは九大滞在前に出席した「第15回日本医学会総会」の記念バッジが杉田玄白の肖像が

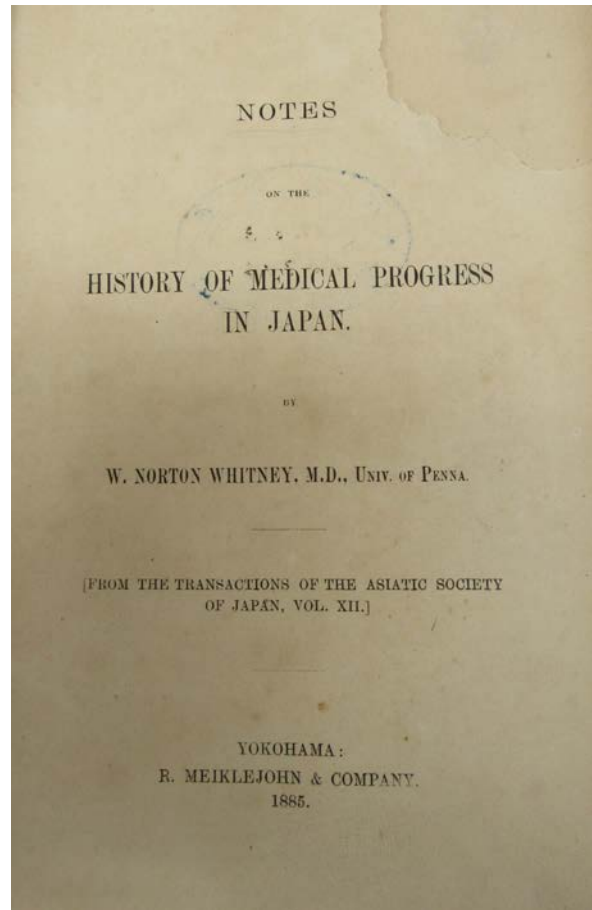


図1

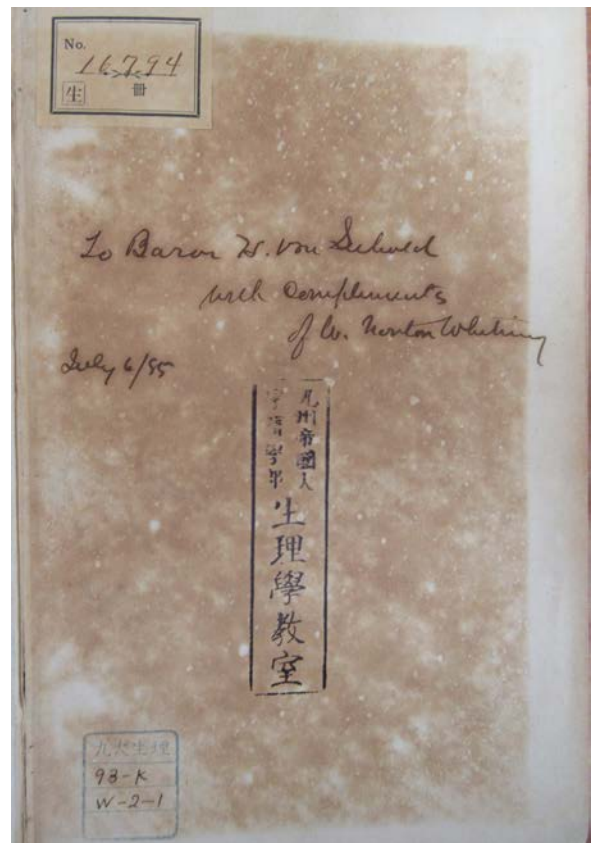


図2

モデルになっていたのが一因であると推測され^{10,11}、「日本医学史覚書」の扉絵には杉田玄白の肖像画が掲載されている。(図3)



図3 (「日本医学史覚書」扉絵)

4. 生理学教室購入の「日本医学史覚書」と「杏仁醫館文庫」を比較して

生理学教室購入の「日本医学史覚書」が岩熊哲旧蔵本である可能性について調査した。幸い「日本医学史覚書」には前章で述べたように書込みが多い。「杏仁醫館文庫」の中で書込みのある書籍を数冊選んで「日本医学史覚書」の書込みの文字と見比べた。

「日本医学史覚書」362頁の中央左端の書込み「松岡玄達」の「松」の字(図4)と「杏仁醫館文庫」/228 <http://hdl.handle.net/2324/1000890629> に挟み込まれていた岩熊哲のメモの下部に記載された「落葉松」の「松」の字(図5)は特徴が似ている。

赤色・青色のペンで書いた丸印や枠線、下線引きも「杏仁醫館文庫」で数多く見られる岩熊哲旧蔵本の特徴である。次の2図が該当する。「日本医学史覚書」336, 337頁(図6)と「杏仁醫館文庫」/235 <http://hdl.handle.net/2324/1001604398> 22, 23頁(図7)である。

単語や文章の1部分を囲むのも岩熊哲旧蔵本では多

く見られる。

「日本医学史覚書」348, 349頁(図8)と「杏仁醫館文庫」/239 <http://hdl.handle.net/2324/1001604551> 174, 175頁(図9)である。

私は生理学教室購入の「日本医学史覚書」は岩熊哲の旧蔵本の確信を持った。岩熊哲は「杏仁醫館隨筆」にこの献辞について書く際に現物を確認せずに記憶のみで書いたのではないだろうか。記憶の中で1日違いは有りがちであるし単に書き誤ったのか編集ミスなのか考えられる要因は多数ある。

また「日本医学史覚書」と同時に購入された書籍「Zeittafeln zur Geschichte der Medizin (WZ 30/P 132/1908 c.1)」⁹<http://hdl.handle.net/2324/1000708678> (図10)にも岩熊哲旧蔵本と同じ特徴が見られる。この書籍も岩熊哲の旧蔵本の可能性が強い。

5. Dr. Whitney と H. von Siebold

ホイットニーと小シーボルト(父親のシーボルトに対して息子の H. von Siebold は小シーボルトと称される)に関する文献を読む¹³⁻¹⁷と両者が同時代に同じ地域(赤坂氷川町の赤坂氷川神社の近く)に居住し外交業務に従事した等の共通点に気付いた。両者の経歴及び関わりのある歴史上の人物について(ホイットニーを中心に)文献から取得した事柄を簡単にまとめた。

日本での滞在期間はホイットニーが明治8(1875)年から明治44(1911)年で小シーボルトは明治2(1869)年から明治28(1895)年である。

ホイットニーは20歳で来日後医学を学び明治11(1878)年から1年間金沢で英語教師をしながら医学の勉強に励んだ。東京に戻り東京大学医学部に入学(聴講生だと思われる)し2学年を修了し明治13(1880)年にアメリカのペンシルベニア大学医学部3年に入学し明治14(1881)年医学の学位を修得し翌年(1882)日本に戻った。明治16(1883)年駐日アメリカ公使館通訳官を任じられ明治28(1895)年まで従事した。公務の傍ら明治16年に赤坂氷川町17番地に診療所を開業した。診療所は規模を広げ「赤坂病院」になり「赤坂病院」は「教会」「社会事業」も行った。

ホイットニー家は歴史上の人物と関係が深い。来日前ホイットニーの父が校長を務めていたニューヨークの実業学校の学生であった富田鉄之助¹⁴(1835-1916、留学当時はニューヨーク領事心得から副領事を務め、後の日本銀行総裁)はホイットニー宅に寄宿しホイットニーの母から英語(聖書)を学んだ。富田鉄之助は日本でのキリスト教普及と日本に新しく設立する「商法講習所(後の一橋大学)」の教職をホイットニーの父に打診し父は受諾した。ホイットニー一家は明治8(1875)年に来日し勝海舟が赤坂氷川町の敷地内に新

築した家に居住した。富田鉄之助は勝海舟の氷解塾生であった。富田鉄之助は福沢諭吉を媒酌人として福沢諭吉邸で明治 7 (1874) 年杉田玄白の曾孫の杉田縫と結婚している。ホイットニーの妹クララ (1860-1936) は勝海舟の三男の勝梅太郎 (1864-1925) と明治 19 (1886) 年に結婚した。小シーボルトも明治 10 (1877) 年より松平忠行宅を借り受け赤坂氷川町 43 番地 (氷川神社近くで現在日本銀行氷川寮の敷地内) に居住している¹⁵。富田鉄之助は明治 15 (1882) 年に「初代日本銀行副総裁」に明治 22 (1889) 年に「第 2 代日本銀行総裁」に就任している。勝海舟、富田鉄之助、ホイットニー、小シーボルト間に繋がりがあがる。

小シーボルト¹⁵⁻¹⁷は明治 5 (1872) 年にオーストリア・ハンガリー公使館の通訳官に採用され明治 5 (1872) 年に在日オーストリア・ハンガリー公使館臨時通訳見習いになり明治 16 (1883) 年に同公使館主任事務官になり明治 20 (1887) 年に代理公使に就任した。「日本医学史覚書」をホイットニーから贈呈されたのは在日オーストリア・ハンガリー公使館主任事務官の時である。小シーボルトは明治 12 (1879) 年に「日本考古学覚書 (Notes on Japanese Archaeology)」を出版している。小シーボルトの膨大な数の日本研究コレクションは美術・工芸・衣料・装飾品・アイヌ関係・考古学等多岐にわたるが書籍の収集について調べると「ベルリン国立図書館東洋部門」に和書 100 冊、「ウィーン・オーストリア国立民族学博物館」に和書 500 冊が収蔵されていた¹⁸。

6. おわりに

「日本医学史覚書」に関する岩熊哲が書いた数行の記事が目にとまり所在が不明だった「日本医学史覚書」を見つける事ができた。貴重資料を記録に残して置く事の大切さ、更に正確な記録を残す事の重要性を改めて感じた。以前に眼科学教室旧蔵資料を目録整理した時に書込みの特徴が「杏仁醫館文庫」と類似資料があった。その資料も岩熊哲旧蔵本の可能性がある。岩熊哲旧蔵本を探し出すヒントの鍵は「杏仁醫館随筆」の中にあるかも知れない。

謝辞

ミヒェル・ヴォルフガング先生 (九州大学名誉教授) にご指導賜り深く感謝申し上げます。

参考文献

- [1] 相部久美子. 医学図書館の「杏仁醫館文庫」と医史学研究者岩熊哲について. 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2015, 2014/2015, pp.19-29.
<http://hdl.handle.net/2324/1523953>

- [2] 岩熊哲. 杏仁醫館随筆(その 1). 九大醫報. 1934, vol.8, no.6, pp.81-86.
- [3] 岩熊哲. 杏仁醫館随筆(その 2). 九大醫報. 1935, vol.9, no.1, pp.37-40.
- [4] 直方市医師会. “第 6 節 鞍手郡医師会時代: 明治の医師. 1. 加来敷馬”. 直方市医師会の歩み. 1982, pp.44-45.
- [5] 直方市医師会. “第 5 節 鞍手郡医師会時代: 省令鞍手郡医師会”. 直方市医師会の歩み. 1982, p.40, 42.
- [6] 直方市医師会. “第 7 節 鞍手郡医師会時代: 明治末・大正初期の医学界. 4. 鞍手郡における医療”. 直方市医師会の歩み. 1982, p.48.
- [7] 岩熊哲. 杏仁醫館随筆(その 43). 九大醫報. 1941, vol.15, no.1, pp.15-21.
- [8] Whitney, Willis Norton. Notes on the history of medical progress in Japan. Meiklejohn & Co., 1885, pp.245-469.
- [9] Pagel, J. L. Zeittafeln zur Geschichte der Medizin. A. Hirschwald. 1908.
- [10] 山川幸雄. 図書館の落穂ひろい 2 珍本の 1 つ. 九大醫報. 1962, vol.32, no.1, p.5.
- [11] 山川幸雄. 落穂ひろい. 医学図書館. 1959, vol.6, no.6, pp.4-5.
- [12] Janik, Erika. A gentleman and a scholar.
<https://onwisconsin.uwalumni.com/features/a-gentleman-and-a-scholar>
- [13] 鮫島近二. ドクトル ホイトニー (Willis Norton Whitney, M. D.) を語る. 眼科臨床医報. 1955, Vol.49, no.3, pp. 225-227.
- [14] 高橋秀悦. 富田鐵之助のニューヨーク副領事就任と結婚と商法講習所 ~ 「海舟日記」に見る「忘れられた元日銀総裁」富田鐵之助 (6). 東北学院大学経済学論集. 2016, No.187. pp.46, 48, 74-87.
<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/research/journal/bk2016/no10.html>
- [15] 徳田誠志. H・V・シーボルトと関西大学博物館所蔵資料. 関西大学博物館紀要. 2003, No.9. pp.62, 74.
<https://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/handle/10112/2974>
- [16] クライナー, ヨーゼフ. “もう 1 人のシーボルト”. 小シーボルトと日本の考古・民俗学の黎明. ヨーゼフ・クライナー編. 同成社. 2011, p.29.
- [17] 原田信男. “ハインリッヒ・フォン・シーボルト略年譜”. 小シーボルト蝦夷見聞記. 平凡社. 1996, p.297.
- [18] クライナー, ヨーゼフ. “小シーボルト資料集成”. 小シーボルトと日本の考古・民俗学の黎明. ヨーゼフ・クライナー編. 同成社. 2011, pp.39, 49.

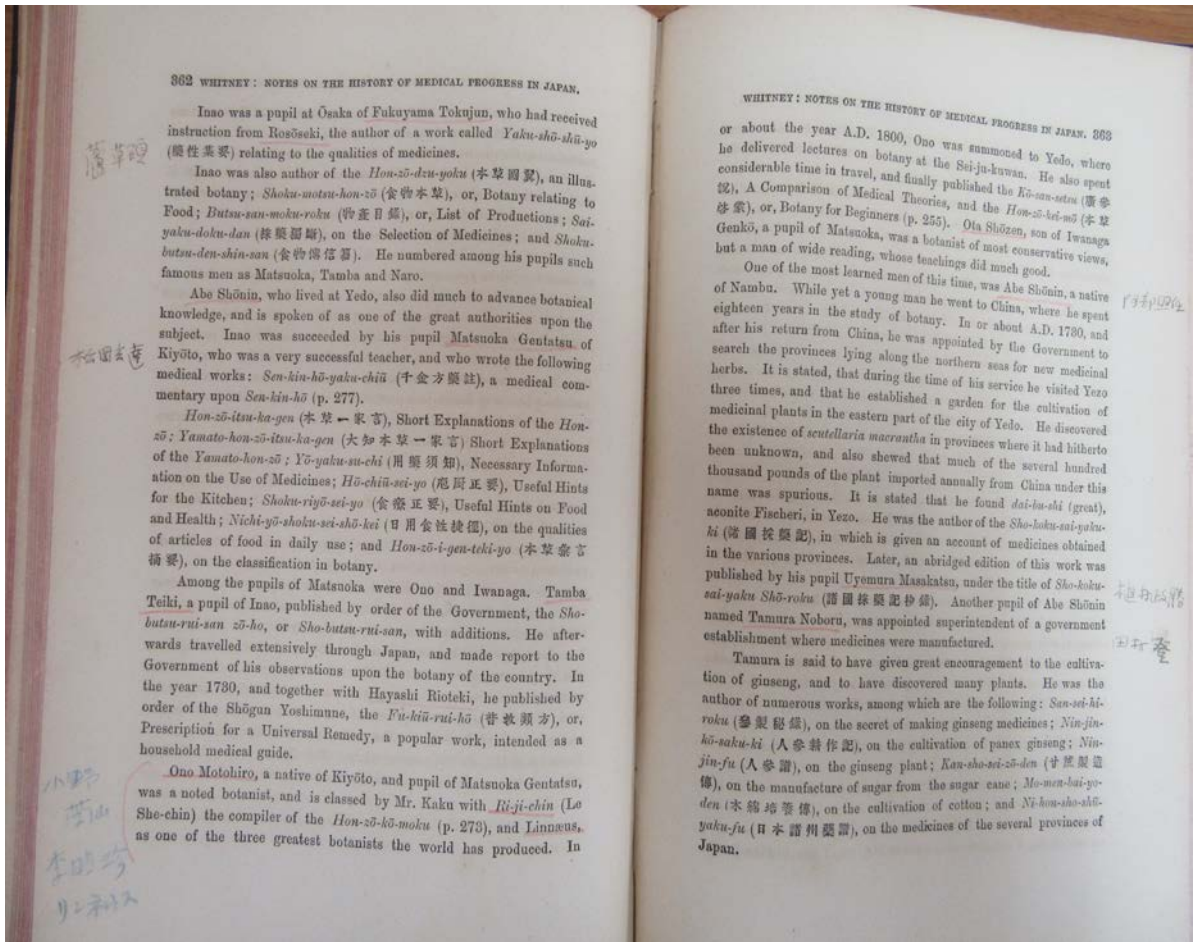


图 4

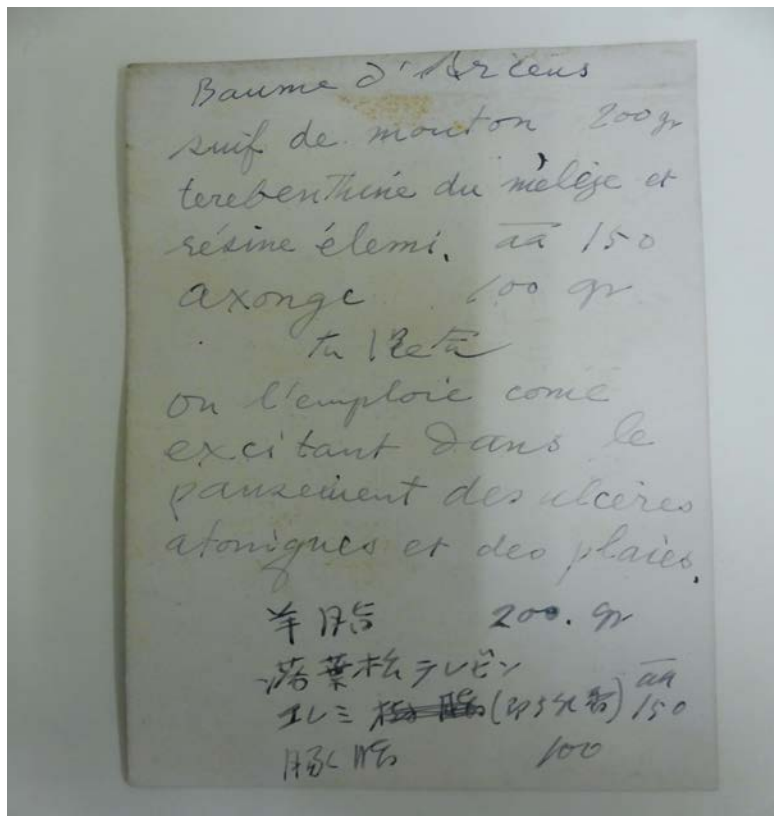


图 5

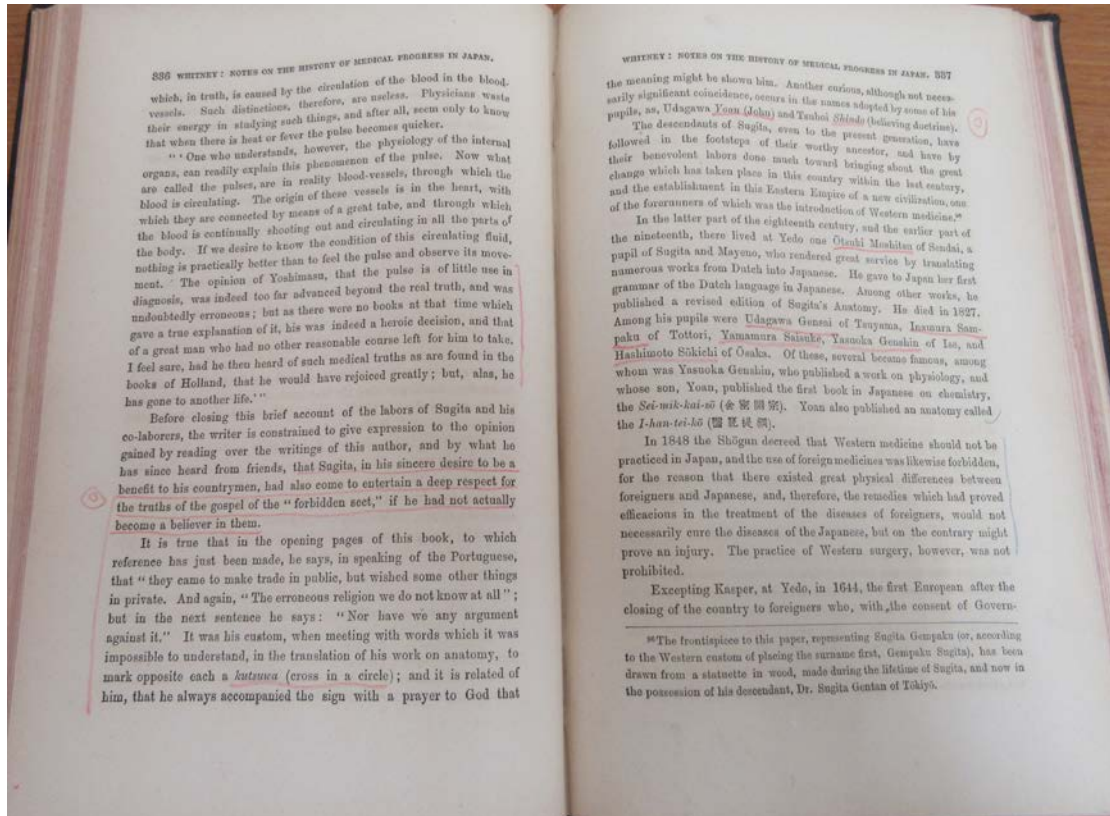


図 6

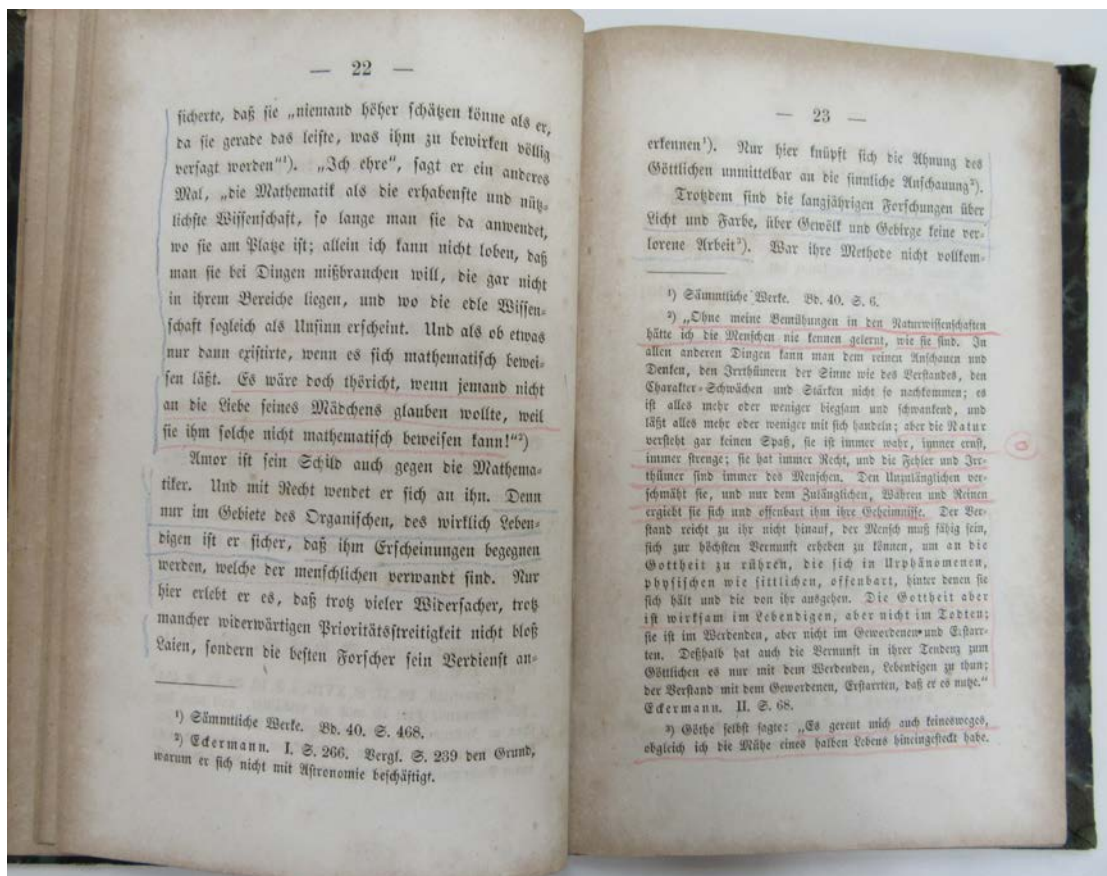
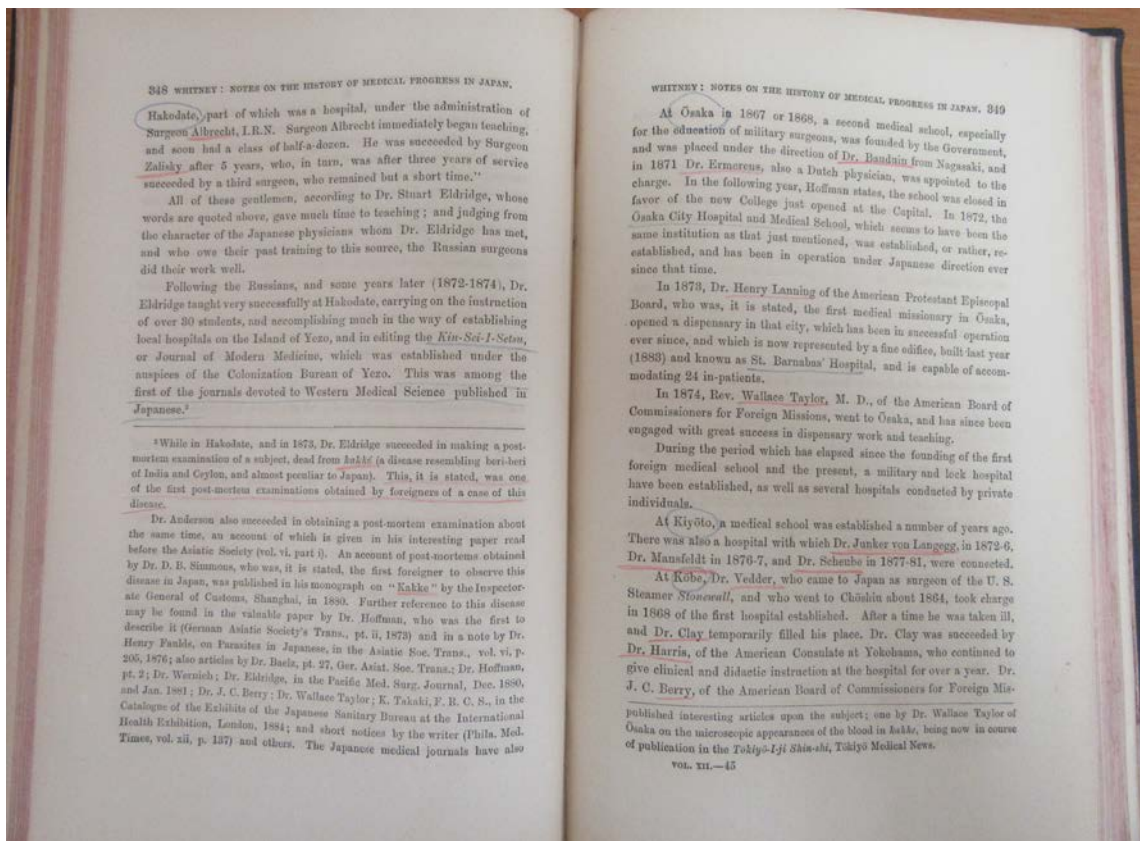


図 7



Hakodate, part of which was a hospital, under the administration of Surgeon Albrecht, L.R.N. Surgeon Albrecht immediately began teaching, and soon had a class of half-a-dozen. He was succeeded by Surgeon Zalsky after 5 years, who, in turn, was after three years of service succeeded by a third surgeon, who remained but a short time."

All of these gentlemen, according to Dr. Stuart Elbridge, whose words are quoted above, gave much time to teaching; and judging from the character of the Japanese physicians whom Dr. Elbridge has met, and who owe their past training to this source, the Russian surgeons did their work well.

Following the Russians, and some years later (1872-1874), Dr. Elbridge taught very successfully at Hakodate, carrying on the instruction of over 80 students, and accomplishing much in the way of establishing local hospitals on the Island of Yezo, and in editing the *Kin-Sei-I-Setsu*, or Journal of Modern Medicine, which was established under the auspices of the Colonization Bureau of Yezo. This was among the first of the journals devoted to Western Medical Science published in Japanese.³

³While in Hakodate, and in 1873, Dr. Elbridge succeeded in making a post-mortem examination of a subject, dead from *hakkô* (a disease resembling beri-beri of India and Ceylon, and almost peculiar to Japan). This, it is stated, was one of the first post-mortem examinations obtained by foreigners of a case of this disease.

Dr. Anderson also succeeded in obtaining a post-mortem examination about the same time, an account of which is given in his interesting paper read before the Asiatic Society (vol. vi, part i). An account of post-mortems obtained by Dr. D. K. Simmons, who was, it is stated, the first foreigner to observe this disease in Japan, was published in his monograph on "Kakke" by the Inspector-General of Customs, Shanghai, in 1890. Further reference to this disease may be found in the valuable paper by Dr. Hoffman, who was the first to describe it (*German Asiatic Society's Trans.*, pt. ii, 1873) and in a note by Dr. Henry Peale, on *Fanatesis* in Japanese, in the *Asiatic Soc. Trans.*, vol. vi, p. 205, 1876; also articles by Dr. Baetz, pt. 27, *Ger. Asiat. Soc. Trans.*, Dr. Hoffmann, pt. 2; Dr. Wernich; Dr. Elbridge, in the *Pacific Med. Surg. Journal*, Dec. 1880, and Jan. 1881; Dr. J. C. Berry; Dr. Wallace Taylor; K. Takaki, F. R. C. S., in the Catalogue of the Exhibits of the Japanese Sanitary Bureau at the International Health Exhibition, London, 1884; and short notices by the writer (*Phila. Med. Times*, vol. xii, p. 137) and others. The Japanese medical journals have also

At Osaka in 1867 or 1868, a second medical school, especially for the education of military surgeons, was founded by the Government, and was placed under the direction of Dr. Bandain from Nagasaki, and in 1871 Dr. Ermereus, also a Dutch physician, was appointed to the charge. In the following year, Hoffman states, the school was closed in favor of the new College just opened at the Capital. In 1872, the Osaka City Hospital and Medical School, which seems to have been the same institution as that just mentioned, was established, or rather, re-established, and has been in operation under Japanese direction ever since that time.

In 1873, Dr. Henry Lanning of the American Protestant Episcopal Board, who was, it is stated, the first medical missionary in Osaka, opened a dispensary in that city, which has been in successful operation ever since, and which is now represented by a fine edifice, built last year (1893) and known as St. Barnabas' Hospital, and is capable of accommodating 24 in-patients.

In 1874, Rev. Wallace Taylor, M. D., of the American Board of Commissioners for Foreign Missions, went to Osaka, and has since been engaged with great success in dispensary work and teaching.

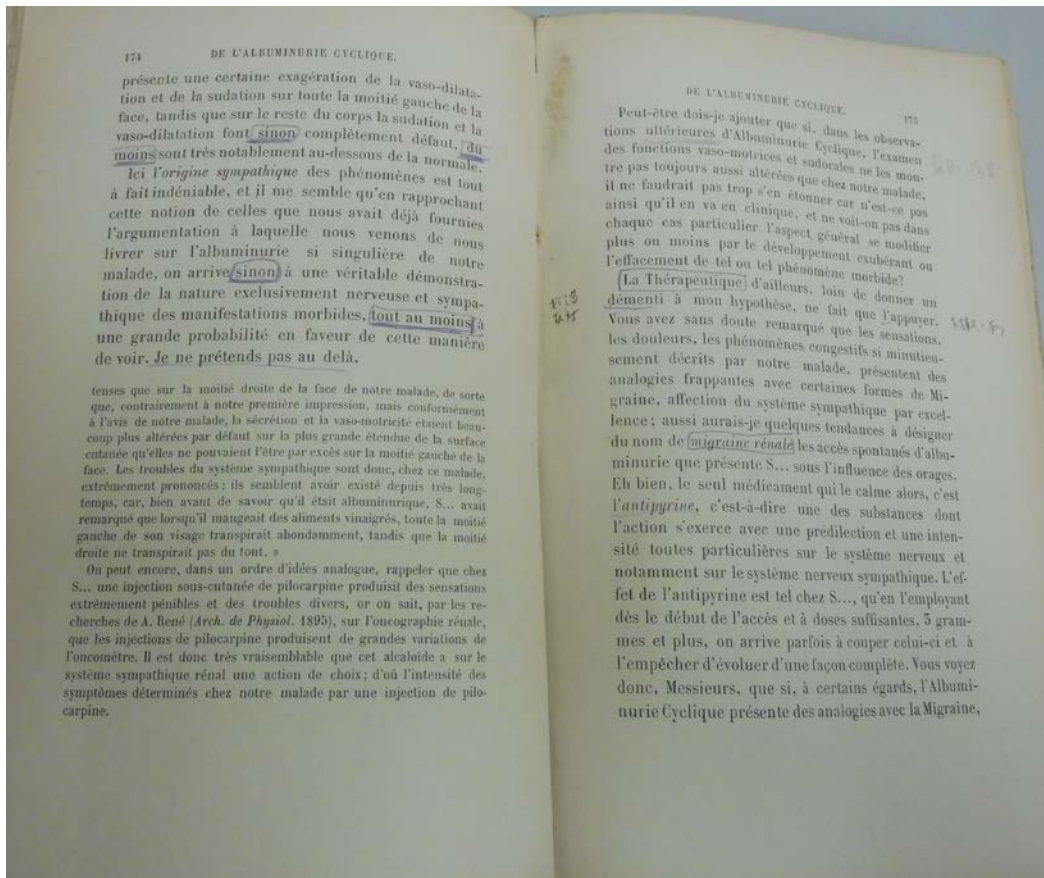
During the period which has elapsed since the founding of the first foreign medical school and the present, a military and lock hospital have been established, as well as several hospitals conducted by private individuals.

At Kiyôto, a medical school was established a number of years ago. There was also a hospital with which Dr. Junker von Langegg, in 1872-6, Dr. Mansfeldt in 1870-7, and Dr. Scheube in 1877-81, were connected.

At Kobe, Dr. Vedder, who came to Japan as surgeon of the U. S. Steamer *Stonewall*, and who went to Chôshû about 1864, took charge in 1868 of the first hospital established. After a time he was taken ill, and Dr. Clay temporarily filled his place. Dr. Clay was succeeded by Dr. Harris, of the American Consulate at Yokohama, who continued to give clinical and didactic instruction at the hospital for over a year. Dr. J. C. Berry, of the American Board of Commissioners for Foreign Mis-

published interesting articles upon the subject; one by Dr. Wallace Taylor of Osaka on the microscopic appearances of the blood in *hakkô*, being now in course of publication in the *Tokyo-Ijii Shin-shi*, *Tokyo Medical News*.

☒ 8



présente une certaine exagération de la vaso-dilatation et de la sudation sur toute la moitié gauche de la face, tandis que sur le reste du corps la sudation et la vaso-dilatation sont sinon complètement défaut, du moins sont très notablement au-dessous de la normale.

Ici l'origine sympathique des phénomènes est tout à fait indéniable, et il ne semble qu'en rapprochant cette notion de celles que nous avons déjà fournies l'argumentation à laquelle nous venons de nous livrer sur l'albuminurie si singulière de notre malade, on arrive sinon à une véritable démonstration de la nature exclusivement nerveuse et sympathique des manifestations morbides, tout au moins à une grande probabilité en faveur de cette manière de voir. Je ne prétends pas au delà.

tenses que sur la moitié droite de la face de notre malade, de sorte que, contrairement à notre première impression, mais conformément à l'avis de notre malade, la sécrétion et la vaso-motricité étaient beaucoup plus altérées par défaut sur la plus grande étendue de la surface cutanée qu'elles ne pouvaient l'être par excès sur la moitié gauche de la face. Les troubles du système sympathique sont donc, chez ce malade, extrêmement prononcés; ils semblent avoir existé depuis très longtemps, car, bien avant de savoir qu'il était albuminurique, S... avait remarqué que lorsqu'il mangeait des aliments vinaigrés, toute la moitié gauche de son visage transpirait abondamment, tandis que la moitié droite ne transpirait pas du tout.

On peut encore, dans un ordre d'idées analogue, rappeler que chez S... une injection sous-cutanée de pilocarpine produisit des sensations extrêmement pénibles et des troubles divers, or on sait, par les recherches de A. Réné (*Arch. de Physiol.* 1895), sur l'encéphalogramme rénal, que les injections de pilocarpine produisent de grandes variations de l'encéphalogramme. Il est donc très vraisemblable que cet alcaloïde a sur le système sympathique rénal une action de choix; d'où l'intensité des symptômes déterminés chez notre malade par une injection de pilocarpine.

Peut-être dois-je ajouter que si, dans les observations antérieures d'Albuminurie Cyclique, l'examen des fonctions vaso-motrices et sudorales ne les montre pas toujours aussi altérées que chez notre malade, il ne faudrait pas trop s'en étonner car n'est-ce pas ainsi qu'il en va en clinique, et ne voit-on pas dans chaque cas particulier l'aspect général se modifier plus ou moins par le développement exubérant ou l'effacement de tel ou tel phénomène morbide?

[La Thérapeutique] d'ailleurs, loin de donner un démenti à mon hypothèse, ne fait que l'appuyer. Vous avez sans doute remarqué que les sensations, les douleurs, les phénomènes congestifs si minutieusement décrits par notre malade, présentent des analogies frappantes avec certaines formes de Migraine, affection du système sympathique par excellence; aussi aurais-je quelques tendances à désigner du nom de migraine rénale les accès spontanés d'albuminurie que présente S... sous l'influence des orages. Eh bien, le seul médicament qui le calme alors, c'est l'antipyrine, c'est-à-dire une des substances dont l'action s'exerce avec une prédilection et une intensité toutes particulières sur le système nerveux et notamment sur le système nerveux sympathique. L'effet de l'antipyrine est tel chez S... qu'en l'employant dès le début de l'accès et à doses suffisantes, 5 grammes et plus, on arrive parfois à couper celui-ci et à l'empêcher d'évoluer d'une façon complète. Vous voyez donc, Messieurs, que si, à certains égards, l'Albuminurie Cyclique présente des analogies avec la Migraine,

☒ 9

Table Xb. in auf Bichat (1748-1806).

Die in die Halbrunde Entwicklung grösstest pathologischen System

Pathologie der Pathologie bildet die Halbrunde Lehre...
Die zweite Gruppe umfasst...
Die dritte Gruppe bildet die Halbrunde Lehre...

Table XIa. in der Naturphilosophie und der dynamisch-therapeutischen Systeme bis zur Haller und Schönbach (1800 bis ca. 1850).

Pathologie und Therapie tragen vollständig die Begriffe naturphilosophischer Denkrichtung...

Naturphilosophie...
Dynamisch-therapeutische Systeme...
Hallers und Schönbachs System...

Table XIc. in der Naturphilosophie und der dynamisch-therapeutischen Systeme bis zur Haller und Schönbach (1800 bis ca. 1850).

Pathologie und Therapie tragen vollständig die Begriffe naturphilosophischer Denkrichtung...

Naturphilosophie...
Dynamisch-therapeutische Systeme...
Hallers und Schönbachs System...

Table XIIc. in der Naturphilosophie und der dynamisch-therapeutischen Systeme bis zur Haller und Schönbach (1800 bis ca. 1850).

Pathologie und Therapie tragen vollständig die Begriffe naturphilosophischer Denkrichtung...

Naturphilosophie...
Dynamisch-therapeutische Systeme...
Hallers und Schönbachs System...